



立川総合病院生殖医療センターに勤務して

立川総合病院

郷 戸 千 賀 子

私は立川総合病院に産婦人科医として勤務しており、専門は生殖医療です。生殖医療センターで日々不妊症に悩むカップルの治療を行っています。最初に赴任したのは、2012年4月でした。途中1年間だけ大学病院に戻りましたが、現在に至るまで12年間勤務しております。生殖医療との出会いは、大学に帰局した2007年でした。当時不妊グループは人気がなく人手不足でしたので、私はわからないながらも連日のように外来を担当し、採卵・胚移植等の手技を経験させていただきました。この経験が生殖に興味を持つきっかけとなりました。しかし体外受精を含む高度生殖補助医療はどこの施設でもできるわけではありません。転勤・妊娠・出産でしばらく体外受精から離れていましたが、いつかまたやりたいという思いは強く、転勤先でも使わなくなった遠心分離機を検査科からもらい、婦人科外来の隅で精子調整をして、人工授精をしていました。しかし人工授精では治療の限界を感じていました。その後2人目を出産し育休中だったところに、立川総合病院への異動を打診されました。この時は、また生殖医療に携われると胸躍ったのを覚えています。この異動が私の医師人生の大きな転機となりました。現在は生殖医療専門医を取得し、ライフワークとして日々研鑽し、治療成績向上に努めています。

当院の高度生殖補助医療は1991年に一般体外受精を開始したのが始まりです。1994年に旧病院(長岡市神田)南館の5階に生殖医療センターが開設されました。'90年代後半には年間採卵数は500～600件に達していましたが、市内で体外受精を行う施設が増えたことも影響し、減少傾向にあり私が赴任した2012年には年間約170件まで落ち込んでいました。その後は少しずつ採卵件数を伸ばし、

さらに菅内閣の肝いりで始まった不妊治療の公的医療保険適応が追い風となり、2024年は年間採卵数300件を超え、2023年には体外受精で年間126名、センター開設以来3,163名のお子さんが当院の体外受精で誕生しています。日本全体で見ても体外受精による出生児は増加傾向にあり2022年は実に10人に1人が体外受精で出生しています。

不妊外来にいらっしゃるカップルの背景は多彩です。高齢・性交障害・精液検査異常・卵管閉塞・排卵障害など原因も多岐にわたります。高齢夫婦という印象が強いかもしれませんが、近年は初経年齢の若年化が影響しているのか、若い人にも内膜症を有する方が増え、体外受精が必要なケースが増えたように感じています。特に印象的なのは、日本の体外受精を求めて海外から来られている方です。自国での体外受精が高額なため来日して治療をうける夫婦や、留学期間を利用して自国で受けられない体外受精を希望する夫婦、会話も通じない日本人男性に嫁いできた方など、ここ数年は常に何組か通院しています。その中でも印象に残っている夫婦がいます。南アジアのイスラム圏



生殖医療センタースタッフ一同

(前列左から2番目が筆者)

から留学してきた夫婦は、帰国までの残り約半年で妊娠させてほしいと受診されました。最初から体外受精を希望され、採卵し凍結胚を作成し胚移植を行いました。2回目の移植の時に、夫のいないところで「私の国では妊娠しない妻は離婚されてしまう」と話され、内診台の上で涙を流していました。しかし帰国のタイムリミットのにもこれ以上の治療はできず、私は気の利いた言葉もかけてあげられませんでした。その方は残念ながら治療は成功せずそのまま帰国されました。帰国後に彼女がどのような人生をたどることになったのかは想像できませんが、自分の無力さに胸が締め付けられる思いがしました。一方中国から嫁いで来られた方は母国語しか話せず、通訳兼友人と毎回受診されていました。年の離れた夫は日本語しか話せず、夫婦間の意思疎通が成立しているとは思えませんでした。最終的に顕微授精を数回行い、妊娠成立し無事に出産されましたが、治療期間中は通訳から今回の治療で妊娠しなければ彼女は離婚され国に帰らされるとプレッシャーをかけられました。治療が成功した際には、これで中国に置いてきた娘を日本に呼び寄せて一緒に暮らせると大変感謝され、小学生ぐらいの娘さんを後日外来に連れてきてくれました。喜ばしいことなのかもしれませんが、正直なところ社会的立場の弱い妻に対する扱いに若干の戸惑いを抱きながら治療をしていました。でも強い方だったので、きっと今頃は夫の面倒を見ながら、中国から連れてきた娘と新たに生まれた息子と、楽しく日本で暮らしていると思っています。

子を願う思いは古来より変わらず、子宝や安産にご利益のある神社は全国各地に存在します。貴族達の間で始まった子宝祈願が江戸時代になると

広く庶民の間に広がり、子宝で有名な神社にはご利益を求め、令和の今日でも多くの人々が訪れています。子は神様からの授かりものとして、神頼みしかなかった時代からすると現在の生殖医療はまさに夢の治療法といえるでしょう。ただこの夢の治療法にも限界はあります。以前50代の女性が不妊外来を受診されました。その方は40代後半で結婚したけど、仕事が忙しく避妊をしていて、そろそろ子供が欲しいと思っているけど、月経が不順になってきたと話されました。私を含めスタッフ一同唖然としました。この方は極端な例ですが、時々世間の妊娠に対する知識不足を感じることもあります。現在日本の少子化は、女性の社会進出が大きく影響しているといわれています。この流れは今後変えることはできないと思っていますし、女性が活躍する社会は大歓迎です。ただ、妊娠したいと思った時にいつでも妊娠できるわけではないことを、社会に出る前に学んでおくことが重要だと考えます。「プレコンセプションケア」という言葉を耳にされた方もいるかと思います。男女とも妊娠・出産に対する知識を学び、自分達の健康や生活習慣を見直す取り組みを言います。不妊治療前の治療として、将来挙児を希望するカップルが自分達の子供をあきらめることがない様、当院でも取り入れていければと考えています。

最後に、当院の生殖医療センターは医師・培養士・看護師・事務がチームとなり、成績向上を目指し日々の診療にあたっています。周囲の協力で助けられ、今日まで続けてこられたと感謝しております。これからもスタッフ一同精進してまいりますので、患者様のご紹介をよろしく願いいたします。